

## 学生の確保の見通し等を記載した書類

### 目次

1. 学生の確保の見通し及び申請者としての取組状況	1
① 学生の確保の見通し	1
ア 定員充足の見込み	1
ア-1. 定員設定について	1
ア-2. 定員充足の見込み	2
イ 定員充足の根拠となる客観的データの概要（京都大学総合人間学部学生）	3
② 学生確保に向けた具体的な取組状況	4
ア すでに実施している事項	4
イ 今後強化する事項	4
ウ 学生納付金設定の考え方	5
2. 人材需要の動向等社会の要請	5
① 人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的（養成する人材像の概要）	5
② 上記①が社会的、地域的な人材需要の動向等を踏まえたものであることの客観的な根拠	6
資料1 学生（京都大学総合人間学部学生）へのアンケート調査結果	8
資料2 企業（NPO 法人含む。）へのアンケート調査結果	19

## 1. 学生の確保の見通し及び申請者としての取組状況

### ① 学生の確保の見通し

#### ア 定員充足の見込み

##### ア-1. 定員設定について

京都大学大学院人間・環境学研究科人間・環境学専攻（以下、本専攻という）の入学定員を博士前期課程（以下、修士課程という）164名、博士後期課程68名とする。その理由を以下に述べる。

環境問題、防災、高齢化社会、感染症対策などの現代の社会課題の解決には、人文・社会科学と自然科学の知を融合した「総合知」が必要である。しかし、総合知の創出と活用を担う人文・社会科学と自然科学を架橋できる人材の不足が指摘されている。分野の架橋の実現には、視野の広い学際的知識と深い教養を基盤として異なる領域の研究者や実践家と対話する能力が必要で、これを学術架橋力と呼ぶ。現代社会においては、学術界のみならず、産業界、行政組織、国際組織などあらゆる領域で学術架橋力を備えた人材が求められている。京都大学大学院人間・環境学研究科（以下、本研究科という）は創設以来、人文科学、社会科学、自然科学を含む多様な専門分野を擁し、学際教育研究を積極的に推進することにより人間と環境の新たな学の創成を目指してきた。本研究科はこれまでに多くの研究業績を挙げ、優秀な学生を世に送り出してきたが、教育研究の主眼は学術界で活躍する人物養成に向けられてきた。しかし、これからは究極の教養ともいえる学術架橋力を持った人物は学術界以外の社会のあらゆる領域で求められており、博士学位を取得した学生に対して学術界以外のキャリアパスを提供することは喫緊の課題となっている。

区分制大学教育課程は、高度専門職業人養成を目的とする修士課程と、さらなる学理を探究する研究者養成を目的とする博士後期課程からなっている。しかし、近年の学術の専門化、社会課題の複雑化により、修士課程修了者のレベルで複雑な社会課題の解決に貢献できるような学術架橋力を修得することは困難になりつつあり、博士学位取得者が社会の様々な領域で社会課題の解決に貢献することが強く期待されている。しかし、現状の大学院博士後期課程のカリキュラムは学術界における研究者の養成に関しては十分な体制が整っているが、産業界、行政機関、国際機関などで活躍するために必要な自身の専門領域に関する知識を他者に伝え対話する力を養成する体制は充分ではない。

このような社会的ニーズや課題をふまえ、本研究科では、現状の共生人間学専攻、共生文明学専攻、相関環境学専攻の3専攻の体制を人間・環境学専攻の1専攻体制に再編する。1専攻化により、学生が学術分野を大きくまたぐような学術越境実践を柔軟に実施できる教育研究体制を確立する。1専攻化と並行して、視野の広い学際知を確実に習得させるために現在の14講座を大きなテーマをもとに関連学術領域が連携した10講座に再編成するとともに、学術越境経験の機会を学生に提供し、学生のキャリアパスの多様性を創出するために附属教育研究施設として学術越境センターを設置す

る。これらの組織改編を通じて、視野の広い学際知、学際知を他者に伝える力である教養知、専門をまたぐ分野間連携実践である学術越境によって学術越境力を修得した人物を養成する。この際、新たな教育研究活動が付加されることになるが、講座再編による教員間の連携促進によるカリキュラムの効率化、及び新規教員を含む学術越境センターの設置により、学生を指導する教員の負担の増加は最小限になる。また、新規の教育研究活動に必要な教室などは確保できる。さらに、現在までの本研究科の修士課程、博士後期課程の定員充足率、本専攻入学者の候補となりうる学部学生のニーズおよび博士学位取得後の就職先となりうる企業、非営利研究機関からのアンケート結果を考慮して、入学定員を修士課程 164 名、博士後期課程 68 名と設定した。これは、現在の本研究科の入学定員と同数であるが、上述の様々な要因を考慮すると適切な人数と判断した。

## ア-2. 定員充足の見込み

これまで本研究科修士課程に入学した学生（定員 164 名）のうち、総合人間学部の卒業者が毎年 30 名程度、京都大学の他学部の卒業者が 20 名程度、国内他大学出身者が 70 名程度、海外の留学生が 35 名程度である。（下表 1 参照）また総合人間学部学生へのアンケートの結果、本専攻の設置に関心を示している学生が全回答者の 81%に及ぶこと、他大学からの入学者も見込めることから人間・環境学専攻修士課程の入学定員を 164 名に設定することは適正であると考ええる。

【表 1】

修士課程入学者の過去5年間の出身大学・学部等の内訳（単位：人）				
	総合人間学部卒業者	京大他大学卒業者	国内他大学出身者	海外の留学生
2017年度	30	17	82	18
2018年度	26	21	70	39
2019年度	37	22	77	41
2020年度	37	32	55	33
2021年度	25	18	52	33
過去5年平均	31	22	67.2	32.8

一方、本研究科修士課程に入学した学生のうち、博士後期課程進学を前提に入学した学生は毎年 50 名程度（参考：過去 5 年の博士後期課程進学者数は 50 名程度／年）である。それに加えて、博士後期課程編入学の希望者と内部進学者を合計すると博士後期課程の定員 68 名を充足している。（下表 2 参照）こうした状況を考慮すると、人間・環境学専攻博士後期課程の入学定員を 68 名に設定することは適正であると考ええる。また、学生アンケートの結果も、博士後期課程の入学定員を充足できる程度の総合人間学部生が博士後期課程への関心を示している。学生へのアンケートの結果の詳細は後述する【資料 1】。

【表2】

博士後期課程入学者の過去5年間の出身大学院・研究科等の内訳 (単位：人)				
	人間・環境学研究科 (修士) 修了者	京大他研究科 (修士) 修了者	国内他大学院出身者	海外の留学生
2017年度	37	2	15	5
2018年度	48	2	14	10
2019年度	49	0	12	11
2020年度	55	2	11	8
2021年度	49	6	6	10
過去5年平均	47.6	2.4	11.6	8.8

また、企業（NPO 法人含む。）（以下、「企業等」という。）へのアンケートの結果、アンケートに回答した多くの企業、法人は、課程博士で学位を取得した人材の採用に積極的であり、「自身の専門知を専門外の他者にわかりやすく伝える力」、「専門の異なる他者と協働して新たな知を創出する力」、「専門知を産業界や行政組織で活用する学術越境の力」、「研究倫理、職業倫理を理解し的確に実践できる力」などの能力を重視する傾向であった。学術越境力を備えた人物を養成するという本専攻の趣旨を評価し、本専攻の修了生を積極的に採用候補としたいと好意的な回答が多く、本専攻修了者には我が国において社会的なニーズが十分にあると考えられる。企業等へのアンケートの結果の詳細は後述する。【資料2】

### イ 定員充足の根拠となる客観的データの概要（京都大学総合人間学部学生）

本専攻の構想を練るにあたり、京都大学総合人間学部の学士課程学生を対象としてアンケート調査を実施した。1回生では対象者数124名、回答者数34名（回答率27.4%）、2回生では対象者数128名、回答者数40名（回答率31.3%）、3回生では対象者数133名で、回答者数39名（回答率29.3%）、4回生では対象者数128名で、回答者数57名（回答率44.5%）、5回生以上では対象者数79名で、回答者数11名（回答率13.9%）となった。合計では対象者数592名のうち、回答者数は181名で、回答率は30.6%となった。

アンケート調査結果から、「現在考えている学部卒業後の進路を教えてください。」の問いに対し、同設問に回答した学部生（181名）の51%にあたる92名が「大学院進学」と回答し、大学院進学希望者が過半数を占める結果となった。また各回答の割合について、学年による大きな相違は認められなかった。また、同設問に「就職」と回答した63名に対して希望する就職先（複数回答可）を聞いたところ、国内企業（94%）、次いで官公庁（19%）となり、海外での勤務を含む選択肢は10%に満たない回答であった。次に、「本構想を踏まえ修士課程への進学についてどのように思われますか」の問いに対し、同設問に回答した学部生（181名）の25%にあたる45名が「進学したい」、40%にあたる72名が「進学を検討したい」と回答しており、65%にあたる117名が修士課程進学に興味を示していることがわかった。

また、学年が上がるに従い、「とても関心がある」「関心がある」の割合が大きくなる傾向が認められた。次に修士課程に進学したい、進学を検討したいと回答した117名に対し、「本構想を踏まえ博士課程への進学についてどのように思われますか」と尋ねたところ、9%にあたる11名が「進学したい」、48%にあたる56名が「進学を検討したい」と回答し、57%にあたる67名が博士課程進学に興味を示していることがわかった。最後に「人間・環境学研究科の1専攻化と学術越境センターの設置による教育課程の改編後の大学院にどの程度関心がありますか」の問いに対し、同設問に回答した学部生（181名）の11%にあたる20名が「とても関心がある」、29%にあたる52名が「関心がある」と回答し、「少し関心がある」と合わせると81%が、教育課程の改変後の人間・環境学研究科に関して興味を示しているという結果となった。各学年による回答の割合も概ね同様の傾向を示した。教育課程の改編について「とても関心がある」、「関心がある」、「少し関心がある」と回答した理由については多様な回答が挙げられたが、多い順に「既存の学術分野の枠にとらわれない研究をする力を身に付けたいから」、「文理融合した総合知を創出、活用する力を身に付けたいから」、「分野を超えた学際研究に参加できそうだから」、「教養知を基盤として異なる学術分野を橋渡しできる「学術架橋力」を養いたいから」となった。【資料1】

## ② 学生確保に向けた具体的な取組状況

本専攻の入学者受入れの方針に適う学生を確保するため、次の事項を中心に取り組む。

### ア すでに実施している事項

京都大学総合人間学部において、選択必修科目として入門科目を提供し、人間・環境学研究科の各講座で専門分野の異なる教員がリレー講義を行って、研究の学際性を1年次生、2年次生に伝えている。3年次生、4年次生向けに提供されるゼミ科目では、多くの教員が人間・環境学研究科の大学院生と共同のセミナーとして開講しており、学部から大学院への接続、大学院への進学意欲を高めることに努めている。

その他、人間・環境学研究科の大学院生が自主ゼミとして「総人のミカタ」という学術分野間の対話を促進するための取組を行っており、これを総合人間学部生にも開放することで、大学院進学意欲の向上を目指している。この取組には研究科として教員も支援を行っている。

### イ 今後強化する事項

京都大学大学院人間・環境学研究科のウェブサイトやパンフレット等の媒体を中心として、本専攻の人材養成目的、取得する学位、3つのポリシー（ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー）、教育研究の内容・方法、入学試験、指導教員、学生の学修の成果、修了後の進路、授業料、経済的支援、その他の特色について広く周知を図る。周知の方法としては学士課程学生を対象とする説明会を開催し、具体的な説明と質疑応答を通じて、きめ細かな情報提供を行うとともに、教員・学生のネットワークを活用して周知・広報を行い、入学者受入れの方針に適う志願者を確

保する。また、学術越境センターが実施する「学術越境プログラム」として、博士後期課程学生の5%程度に対して、海外留学、長期インターン、共同研究などの実践を支援するとともに、学術越境活動実践にかかる費用と日本学術振興会特別研究員と同程度の奨学資金の提供を計画している。

## ウ 学生納付金の設定の考え方

上述のように、京都大学大学院人間・環境学研究科は修士課程、博士後期課程とも入学者は定員を充足する状況となっている。また、学生に対するアンケートの結果も今後とも従来同様の入学志願動向が続くことを示している。これらを考慮すると、学生納付金については従来の設定を維持することが適切であると判断する。

## 2. 人材需要の動向等社会の要請

### ① 人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的（養成する人材像の概要）

- i) 大学などの教育研究機関において教養教育を担当できる教育研究者：専門を共有しない一般の人々に専門学術知を伝達し、学術のエッセンスを社会に開く人物

本専攻では、修士課程における「研究を他者と語る」、博士後期課程における「教養教育実習」、  
「学際研究演習」を通して、専門を共有しない他者に自身の専門学術知を伝える能力を修得できる教育を提供し、大学において教養教育を担当する教育研究者をはじめ、博物館の学芸員、サイエンスライターなど学術のエッセンスを社会に発信する人物を育成する。

- ii) 人文・社会科学の知と自然科学の知を融合して「総合知」を創出する研究者：新たな学際的学術領域の創成を牽引する人物

本専攻では、「学術越境プログラム」により人文・社会科学と自然科学を架橋するような分野横断的な共同研究プロジェクトを学生が自律的に計画し、推進することを通して、専門の異なる研究者との深い対話を通して新たな学際研究を創成する力を涵養する。こうした共同研究の経験から習得した分野を越えた対話力、チームとして研究を推進する力などを基盤として、博士学位取得後も社会課題の解決のために人文・社会科学と自然科学の融合が不可欠な新分野である環境科学、持続可能性科学をはじめ、脱炭素化や感染症対策のための新学術領域の創成を牽引するような人物を育成する。

- iii) 学際知を社会の諸領域で活用して社会価値創造する実務家：学術の成果の社会実装に貢献できる人物

本専攻では、視野の広い学際知と専門学術知を他者に伝える力である教養知を基盤として、それらを学術界に閉じることなく、産業界、行政機関を含む社会の多様な領域の中で活用する力を身に付けるための様々な取り組みを学術越境センターが中心となって推進する。大学院で身に付けた学知を産業や行政へと越境させることを通して、学位取得後、専門学術知に根差した新たな事業を展開することにより社会価値創造を進めることができる実務家となりうる人物を育成する。

iv) 学際知を異なる文化圏・言語圏の人々に発信する教育者・実務家：文化や言語の違いを越境した深い対話により国際的な相互理解の深化に貢献する人物

本専攻では、学生が長期海外留学、長期の海外フィールドワーク、国際共同研究などに積極的に関与することを奨励し、文化や言語が異なる研究者や実務家との深い対話を通じた協働の経験を通して、自身の学知を国際的に発信する力を養成する。このような経験を基盤として、海外の大学や研究機関、国際組織やNPOなどで日本と諸外国との間の学術架橋に貢献することのできる人物を育成する。

## ② 上記①が社会的、地域的な人材需要の動向等を踏まえたものであることの客観的な根拠

本専攻の構想に対する意見を把握するために、過去に本研究科修了生が就職した実績があり、日本国内に立地する企業等（NPO 法人を含む）に対してアンケート調査を行った。まず、本専攻のインターンシップ先や課程修了後の進路に関係し得る業種を中心に、174社に対して2022年1月にアンケート調査票を電子メール配信し、計102社から回答を得た。

その結果、本構想の基本的な方向性に関する設問については、1専攻化と講座再編については「評価できる（76%）」という回答が多数となり、「今後の実績を見守りたい（22%）」、「自社の求めているものとは異なる（2%）」を大きく上回った。もう一つの設問である学術越境センターの設置については、「評価できる（80%）」という回答が多数となり、「今後の実績を見守りたい（19%）」、「自社の求めているものとは異なる（1%）」を大きく上回った。両方の設問について評価できるという回答が過半数を占めており、今回の組織再編の基本的な方向性については肯定的な評価を受けているといえる。

今回の組織再編の特徴に関する評価についての設問（複数回答可）については、「外部組織との連携を強化して分野を越えた対話力の養成を目指すこと（80%）」についての評価が最も高く、次いで、「学際を目指しつつも、学際知の専門性の深化を基盤に据えること（66%）」、「一専攻化により、教員や学生の柔軟な交流が可能となり学際研究が活発化すること（30%）」となった。「学部と研究科の構造を一体化することで総合人間学部生の大学院進学率が上がること（4%）」に対する評価は比較的少数にとどまった。また、その他として「ゼネラリストではなく、専門性の深化・人と人を繋ぐなど、多様な尖った人材を育成すること」や、「共同研究など民間資金を活用した産学連携活動の活性化」のような評価も自由記述として挙げられていた。全体の傾向として、本部局のミッションである学際研究教育の更なる推進に関連した特徴が高く評価されていることが見て取れる。

学生が身に付けておくべき素養の重要性に関する設問（5点満点で評価）では、「専門の異なる他者と協働して新たな知を創出する力（平均4.8点）」で最も高く、企業が最先端の研究を進める力を重視していることが示された。次いで、「自身の専門知を専門外の他者にわかりやすく伝える力（平均4.6点）」、「専門知を産業界や行政組織で活用する学術越境の力（平均4.2点）」、「研究倫理、職業倫理を理解し的確に実践できる力（平均4.2点）」と続く。これらは専門知を企業活動の中で活用していくために必要な力であると

考えられる。また、自由記述として「考え抜く力、志を貫く力、周囲を巻き込む力」や、「客観的な視野と多様性を認める力、主体性と積極性」の様な素養も記載されていた。

本研究科が育成した人物を採用したいかという設問については、「積極的に採用したい（49%）」が最も多く、次いで、「採用を検討してもよい（37%）」、「その他（14%）」と続く。少数ではあるが、「採用には消極的（1%）」という回答も得られた。全体としては、採用してもよい、積極的に採用したいを合わせると過半数を超えており、今後本研究科が育成した人物の採用を企業等が前向きに検討していることが分かった。最後に、今後の新卒採用者における博士学位をもつ人材割合の方向性についての設問に対しては、「増やす方向（30%）」、「現状維持（70%）」という回答であった。過半数には及ばないものの、一定数の企業が今後博士学位取得者の採用を検討していることが分かった。

自由記述においても、新専攻で養成を目指す人材像への期待を示す内容や建設的な意見が多く得られ、こうした意見は、本専攻において養成を目指す人材と社会的需要が一致していることを示すものである。

#### 【資料2】

本研究科の修了生は修士課程、博士後期課程とも専門分野が多岐にわたることから、ある特定の地域や職種に焦点を当てたものではないが、修了生は、日本国内、国外を含め多様な職種、分野で活躍しており、上記アンケート結果が示すように、本研究科が養成しようとしている人物に対する需要も高い。

外国人留学生の修了後の進路に関しては、修士課程の場合、博士後期課程進学が35%程度、日本国内での就職が36%程度、本国に帰国してからの就職が29%程度となっている。博士後期課程の場合は、日本国内での就職が39%程度、本国に帰国してからの就職が46%程度となっている。修士課程、博士後期課程とも外国人留学生のほとんどが修了後に就職できており、社会からの十分な人材需要があると言える。

以上のことから、本専攻の理念、人物養成の目的、特徴等は、企業等における人材需要の動向に合致しており、その要請に応じていけるものと考えられる。



## 学生（総合人間学部学生）へのアンケート調査結果

### 1. 調査の趣旨

本専攻への参加候補者となり得る本学学士課程の学生の意向を把握するため、アンケート調査を行った。

### 2. 調査の対象及び回答数

京都大学総合人間学部の在学生1～8回生（592名）を対象として2022年1月にアンケート調査（参考資料1）を実施し、181名より回答を得た（回答率30.6%）。

### 3. 調査の内容及び方法

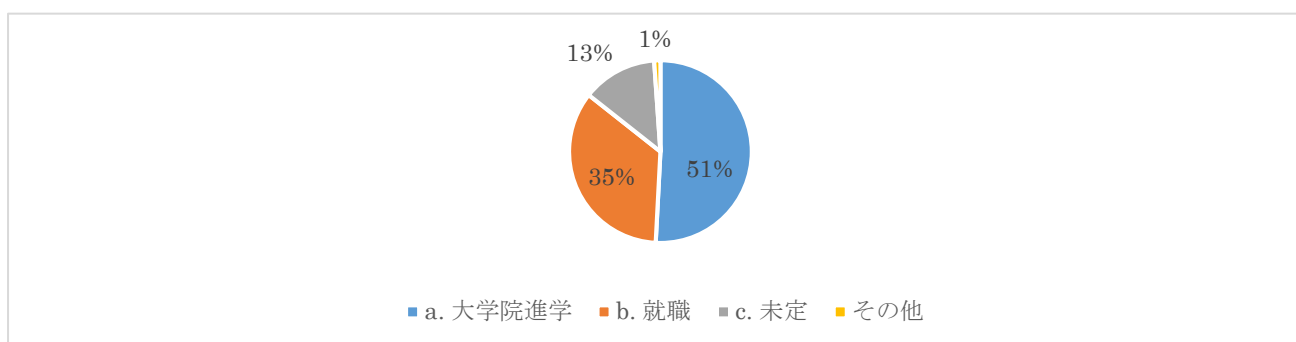
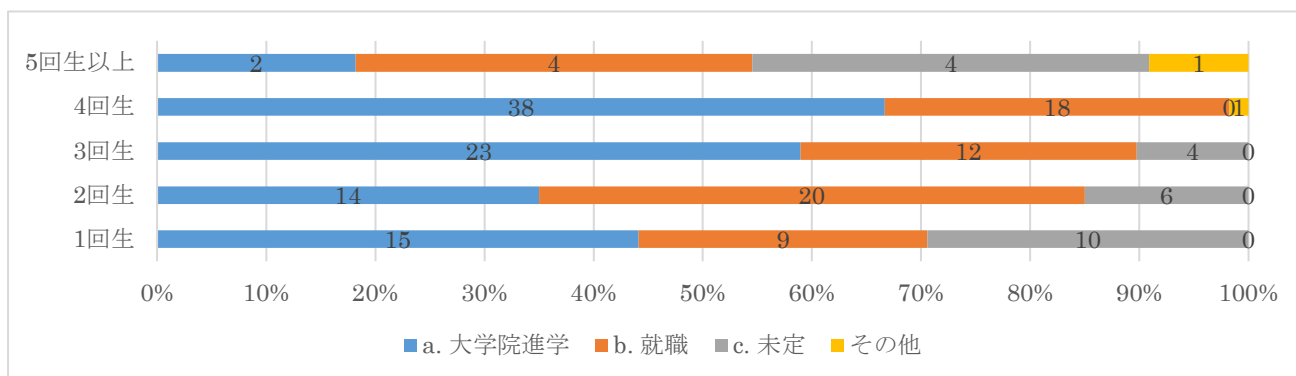
本専攻の構想の概要を説明したうえで設問を記載した調査票（参考資料1）を用いて、オンラインフォームにより配布・回収した。

### 4. 調査結果

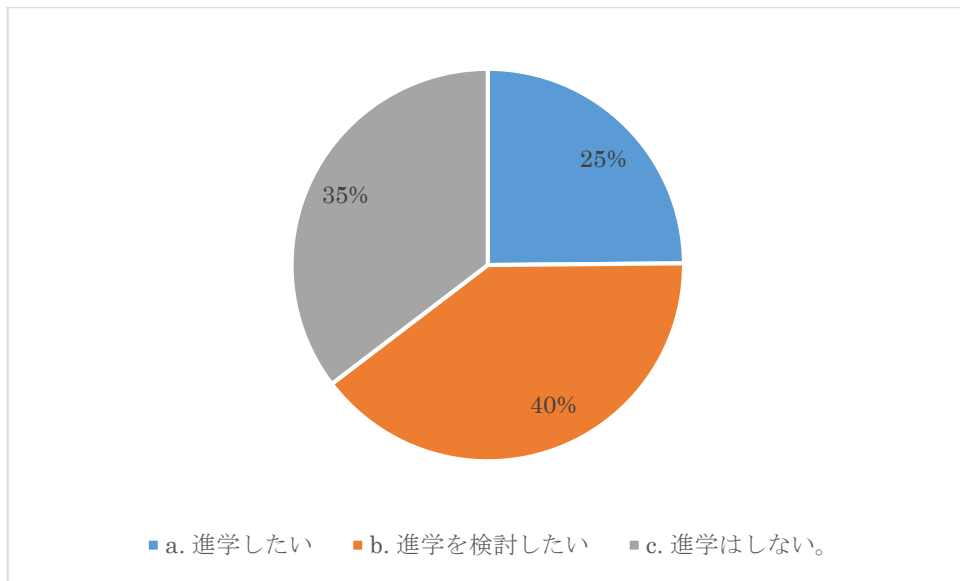
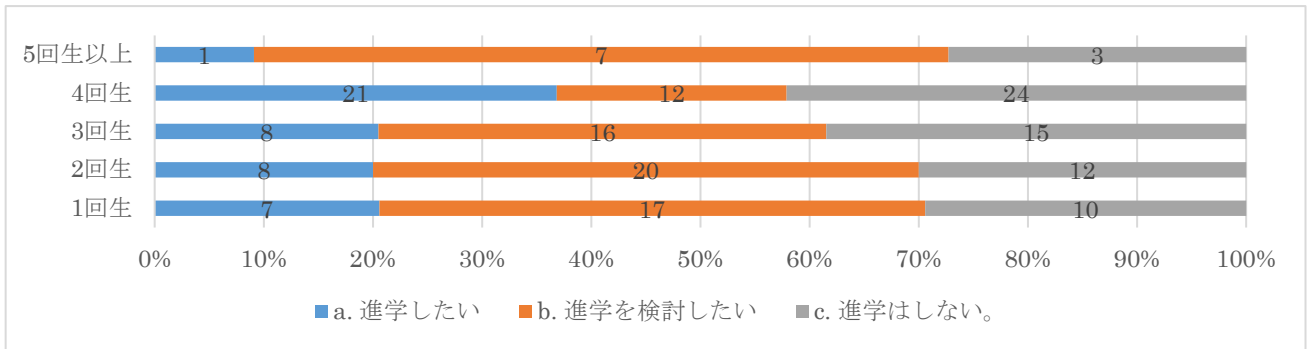
主要な設問について、回答データを示す。

#### 1. 現在考えている大学卒業後の進路を教えてください。

- a. 大学院進学 →3 番へ
- b. 就職 →2 番へ
- c. 未定 →3 番へ
- d. その他（ ） →3 番へ



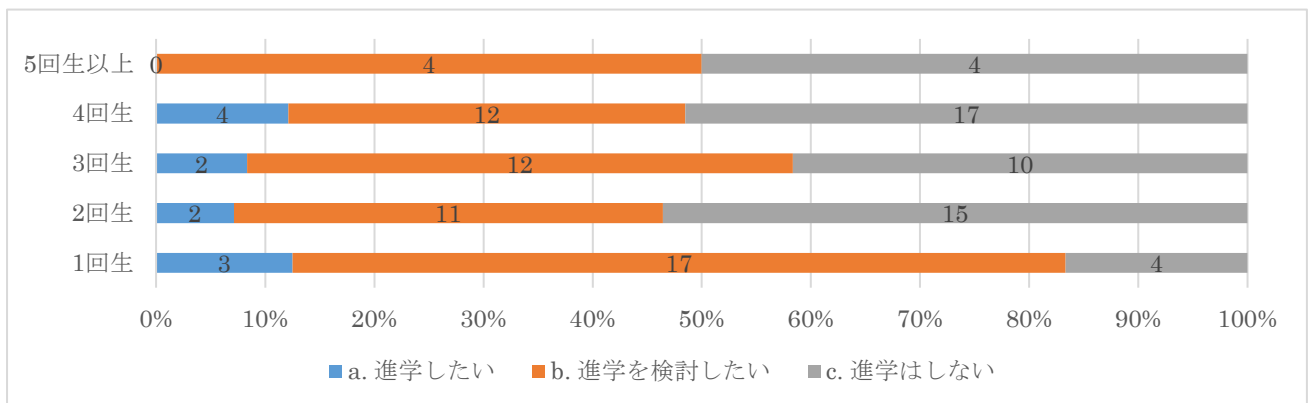


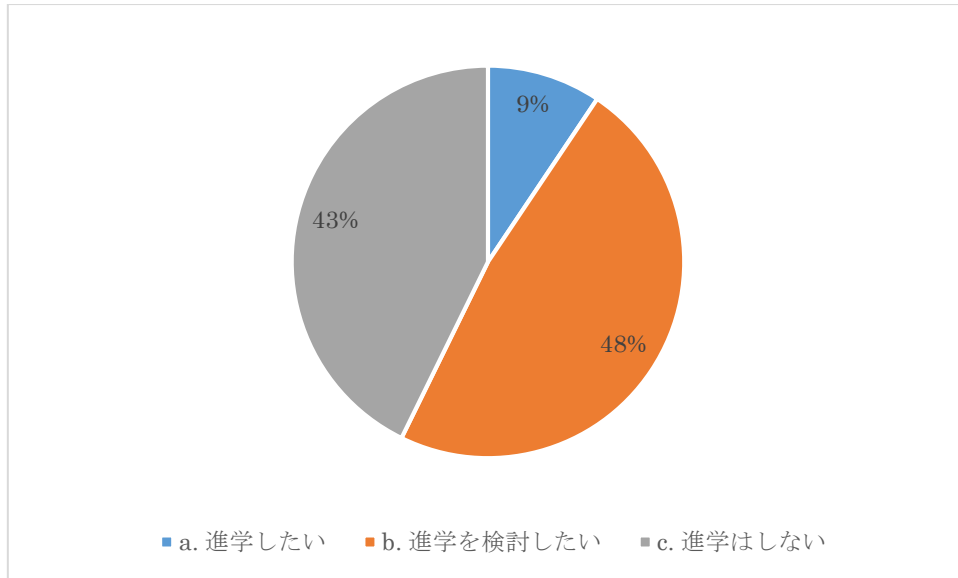


4. 本構想を踏まえ博士課程への進学についてどのように思われますか。

- a. 進学したい
- b. 進学を検討したい
- c. 進学はしない

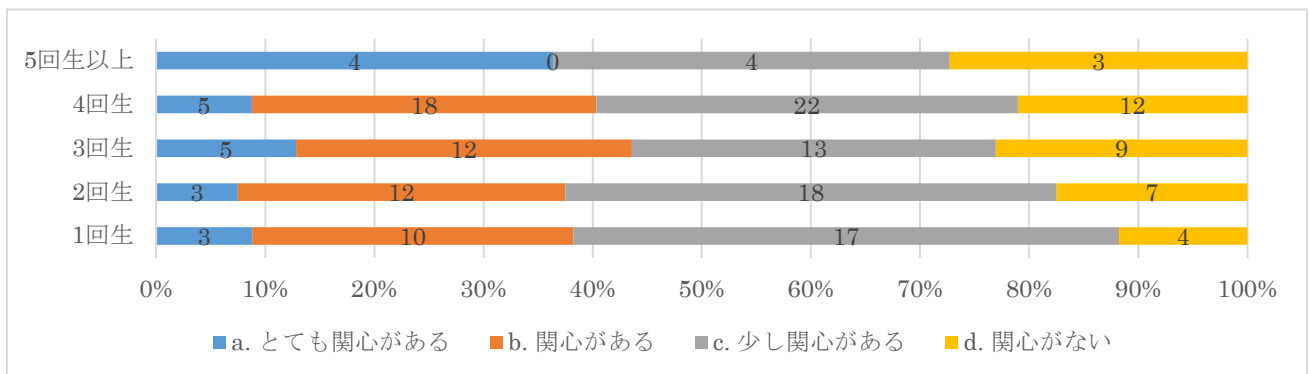
→ 回答後 5 番に進んでください。





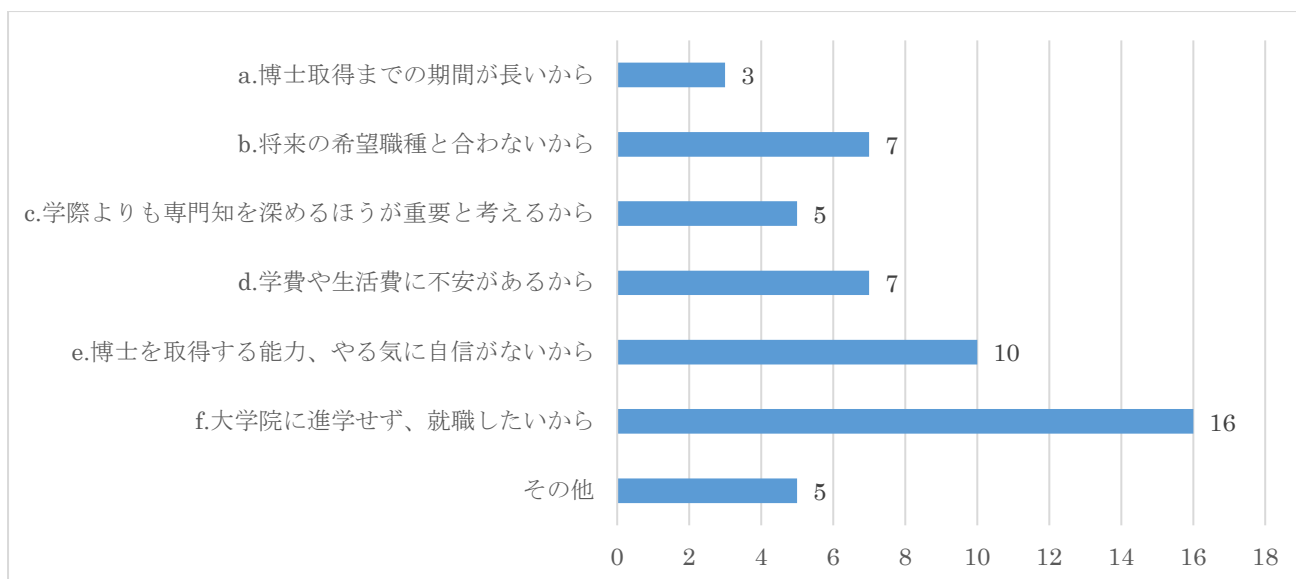
5. 人間・環境学研究科の1専攻化と学術越境センターの設置による教育課程の改編後の大学院にどの程度関心がありますか。

- a. とても関心がある →6 番へ
- b. 関心がある →6 番へ
- c. 少し関心がある →6 番へ
- d. 関心がない →7 番へ









8. 人間・環境学研究科の1専攻化に対する要望、期待する点、また学術越境センター全般に対しての疑問などがあれば記述してください。

- ・1専攻化には関心があります。学際的な心持が醸成され、新たな（そして本質的な）視点の形成に役立つと思いました。ただ、学際的だと声高に叫ぶために中途半端なコラボ授業やそれっぽいだけの課題を課すのはやめて欲しいとも思います。他領域の知識が必要となったとき、そこへ簡単にたどり着ける、門戸が開かれているという組織であることが一番必要なことだと考えるからです。学際的というのは、初めから闇雲に分野を横断すればいいというわけではないはずで、興味関心を抱えて自分の学問を突き詰めていく中で他の学問が必然的に必要となったときに背中を押してくれる風土のことを学際的と呼んで欲しいと思っています。そういう環境を実現するポテンシャルは人環に確かにあると、総人に在籍しながら思い、今後の組織の形に期待しました。
- ・一人で研究していくのは限界があります。一つの分野に複数の研究室が携わり、競いながら、チームとして深く学んでいけるような体制作りを希望します。
- ・来年度から所属しますが、自分が所属しているうちに改変が行われてくれれば良いと思います。
- ・確かに、現行の3専攻制（および総人の5学系制）には疑問の残る部分もあり、実態として学部・研究科、あるいは学系・専攻という単位で連携して教育・研究が行われていると言えるのか、そもそもその専攻の分け方にはどのような根拠があるのかなど、様々な問題が思い浮かぶ。  
人環への進学を希望する者として、研究や学習において、関連するそれぞれの分野の教員の指導を受けられたり、より一般に、講義などにおいて様々な分野から刺激を受けられたりすることは、総人・人環に対して強く期待したいことではある。
- ・1専攻化や学術越境センターの理念はよいことだと思う。様々な分野が集まっている総人・人環の強みを活かせるようになるのはいいことだと思う。
- ・制度変更によって指導・研究の実態がどう変わるかが重要。講座にとられないコミュニケーションを期待するなら、組織全体として相互交流のハードルを低くするような雰囲気づくり、きっかけづくりに取り組む必要があると思います。特に、旧教養部所属教員の退職が目立つようになり、新しい人環らしさ・総人らし

さを明確に位置付けていく時期に入っているのではないのでしょうか。具体的には、教職員の採用では、講座の維持のみならず、講座の再編や学際研究への協力、学生指導への理解をしていただける方にすること、学生の入学試験では、1専攻化を前提にした「基礎学力」の再定義と、研究への意欲や斬新さを評価する仕組みづくりをすること、等々の実践が伴うべきでしょう。改革の成果は10年後、20年後に現れます。期待しています。

- ・学術越境があるのだとすれば、それがもっと可視化されてほしい(先生同士の交流などが学生もより認識できると、意味を持つと思う)
- ・専攻を1つにただけでは、望む結果が得られないのではないかと。研究室間の交流を促す具体的な取り組みがなければうまくいかないのでは。共同研究をするといっても、結局人間関係由来のつてによるものが大きいと思うので、交流の機会をたくさん作るのはどうだろうか。
- ・文系科目はよく分からないが、理系科目に関しては広く浅く教えてしまうとその原理が分からず、内容が身につかないかその先の勉強に時間をとられ、狭く深く教えてしまうと理学部や工学部では常識とされていることを知らないということになるので、その教育方針には大変関心がある。私は化学系で、工学部科目よりも理学部科目をとっているのですが、理学部では学習するが工学部では学習しないことをあまり知らないが、例えば工学部では、理学部では開講されていない高分子や化学工学について学ぶことができる。一方総人の化学系の専門科目では、有機化学や物理化学などの一部の領域と先生方の研究についての話という感じで、もちろん大変面白いが、各先生方の話は独立しており、文理融合に関してもそこまで強く感じることはできなかった。

文理融合に過度に固執するのもよくないとは思いますが、文系の学生が、川の水に含まれる成分について知るために分析化学の先生に依頼するといった話は、とても総人らしさを感じると勝手に思っている。1専攻化によって、形だけでなく中身も変わることを期待する

- ・インターンシップや学際研究・学際実践活動には、大学院生の金銭的負担が課題となります。インターンシップや学際研究・学際実践活動のための大学院生向け助成プログラムを求めます。
- ・学際的越境的な研究を構築するにあたり、基礎となる従来の枠組みの体系的な学問も（必要に応じて他学部/他研究科のカリキュラムに頼りながら）利用しやすく、学びやすくなることを期待したい。
- ・「総合知」を養って、分野間の壁の撤廃を推し進めてほしい一方で、知が次元の低いものになってしまう恐れがあると思う。
- ・1専攻化によってこれまで出来た研究が出来なくなるのではないかとという疑問がある。

京都大学大学院人間・環境学研究所



京都大学学部生対象アンケート  
「大学院人間・環境学研究科に関するアンケート」

大学院人間・環境学研究科では、教養知を基盤として異なる学術分野を橋渡しできる「学術架橋力」を養成し、将来、人文・社会科学の知と自然科学の知を融合した「総合知」の創出と活用に貢献できる人物の輩出を目的に、現在の専攻・講座の再編による新専攻「人間・環境学専攻」と新たな組織「学術越境センター」の設置を計画しています。講座の再編により教養を基盤とした視野の広い学際知の教育体制を確立し、学術越境センターが提供する海外大学への留学、企業への長期インターン、他の研究組織との共同研究などを通して、分野を超えた対話力を養成します。

具体的には、専攻・講座の再編と学術越境センターの設置により以下のような教育課程の改善が期待できます。

1. 研究テーマの共通性に基づいた大括りの講座を編成して各講座の教育研究内容を明確化し、講座内のコミュニケーションを活性化して視野の広い学際知の教育を実現します。
2. 現在の3専攻を1専攻に再編して専攻の壁をなくすことで、講座間の交流の自由度を高め、学生がより柔軟に共同研究を進められる環境を作ります。
3. 総合人間学部と人間・環境学研究科の講座組織を統一し、学部と大学院が一体化した教育・研究カリキュラムを編成し、学部生と大学院生の交流を促進します。
4. 海外研究機関への留学や共同研究、インターンを含む産官学連携、国内研究機関との共同研究を研究科として一体的に推進するための組織として学術越境センターを設置して、学生の「学術越境する活動」を通して専門に閉じることなく分野を超えた対話ができる力を養成します。
5. 研究者に限らない高度な専門職業人の養成（キャリアパスの多様化）にも取り組みます。

なお、本設置計画は現在構想中のものであり、今後、計画内容に変更があり得ること申し添えます。

この計画を推進するにあたり、総合人間学部の皆さんを対象としたアンケートを実施いたします。ご協力をお願いします。

学年 ( ) 回生

所属学系：

- |            |            |            |
|------------|------------|------------|
| (1) 人間科学系  | (2) 認知情報学系 | (3) 国際文明学系 |
| (4) 文化環境学系 | (5) 自然科学系  | (6) 未分属    |

1. 現在考えている大学卒業後の進路を教えてください。
  - a. 大学院進学 →3 番へ
  - b. 就職 →2 番へ

- c. 未定 →3 番へ
- d. その他 ( ) →3 番へ

2. [1 で b を選択した人] 希望する就職先を教えてください (複数回答可)。

- a. 企業 (国内で働く)
- b. 企業 (海外で働く)
- c. 官公庁
- d. 国際機関
- e. NPO 法人 (国内・海外含む)
- f. その他 ( )

→ 回答後 3 番に進んでください。

3. 本構想を踏まえ修士課程への進学についてどのように思われますか。

- a. 進学したい →4 番へ
- b. 進学を検討したい →4 番へ
- c. 進学はしない →5 番へ

4. 本構想を踏まえ博士課程への進学についてどのように思われますか。

- a. 進学したい
- b. 進学を検討したい
- c. 進学はしない

→ 回答後 5 番に進んでください。

5. 5.人間・環境学研究科の1専攻化と学術越境センターの設置による教育課程の改編後の大学院にどの程度関心がありますか。

- a. とても関心がある →6 番へ
- b. 関心がある →6 番へ
- c. 少し関心がある →6 番へ
- d. 関心がない →7 番へ

6. [5 で a~c を選んだ人] 関心がある理由を以下から選んでください (複数回答可)。

- a. 教養知を基盤として異なる学術分野を橋渡しできる「学術架橋力」を養いたいから
- b. 文理融合した総合知を創出、活用する力を身に付けたいから
- c. 既存の学術分野の枠にとらわれない研究をする力を身に付けたいから
- d. 在学中に留学やインターンシップを行いたいから
- e. 分野を超えた学際研究に参加できそうだから
- f. 国際共同研究への参加により、国際的な就職に有利だから
- g. 大学での教育職の就職に有利だから

- h. 産官学連携活動を通じてアカデミア以外の就職の道を広げたいから
- i. その他 ( )

→ 回答後 8 番に進んでください。

7. 【5 で d を選んだ人】 関心がない理由を以下から選んでください (複数回答可)。

- a. 博士取得までの期間が長いから
- b. 将来の希望職種と合わないから
- c. 学際よりも専門知を深めるほうが重要と考えるから
- d. 学費や生活費に不安があるから
- e. 博士を取得する能力、やる気に自信がないから
- f. 大学院に進学せず、就職したいから
- g. その他 ( )

→ 回答後 8 番に進んでください。

8. 人間・環境学研究科の 1 専攻化に対する要望、期待する点、また学術越境センター全般に対しての疑問などがあれば記述してください。

( )

アンケートは以上です、ご協力ありがとうございました。  
京都大学大学院人間・環境学研究科

## 企業等へのアンケート調査結果

### 1. 調査の趣旨

本専攻の構想に関する産業界の意見を把握するため、本専攻の課程修了後の進路に関係し得る企業等を中心にアンケート調査を行った。

### 2. 調査の対象及び回答数

企業等（NPO 法人含む）174 社に対して 2022 年 1 月から 2 月にかけてアンケート調査（参考資料 2）を電子メールにて配信し、102 社（法人）より回答を得た（回答率 58.6%）。

### 3. 調査の内容及び方法

本専攻の構想の概要を説明したうえで設問を記載した調査票（参考資料 2）を用いて、オンラインフォームにより配布・回収した。

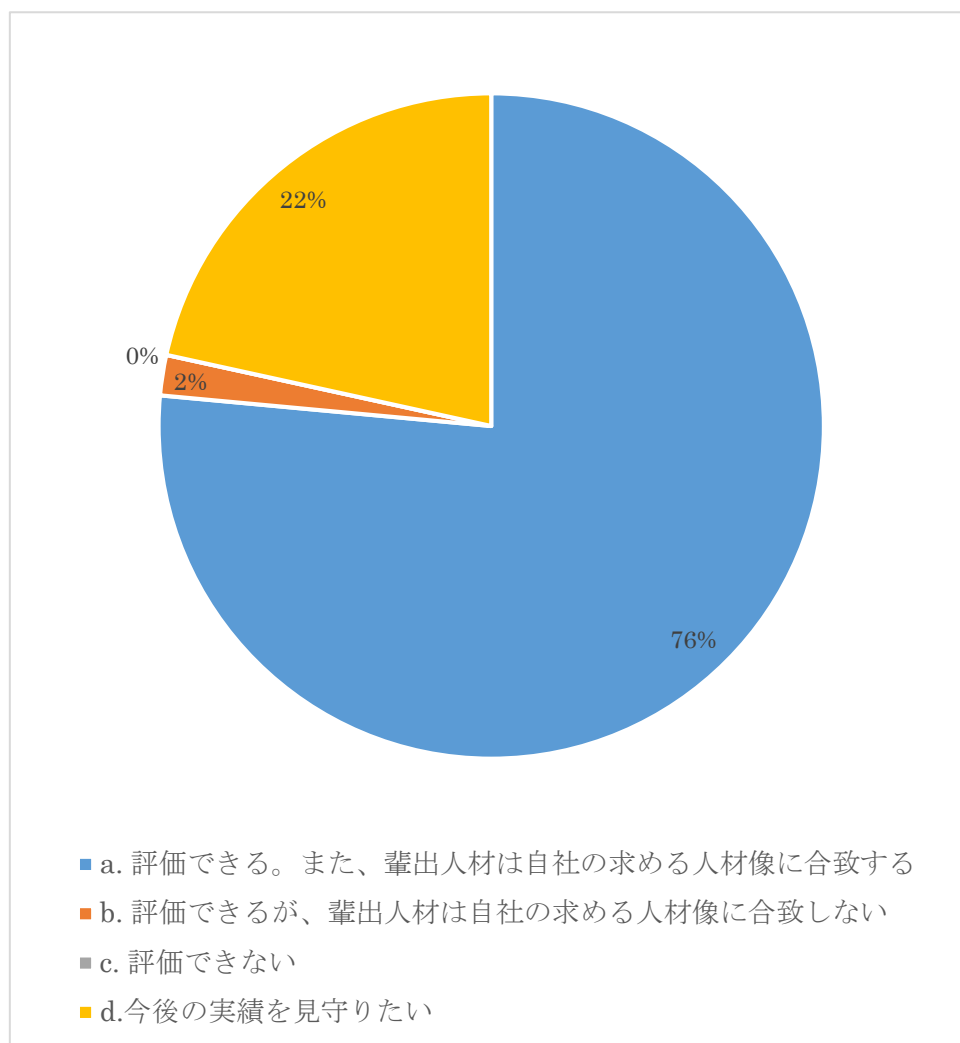
### 4. 調査結果

以下、回答データを示す。

1. 前文のとおり、本研究科では 異なる学術分野を橋渡しできる人材を養成 することを目指しています。本研究科が目指す「学術架橋力の養成」の実現には、周辺分野との対話により深化された視野の広い学知である「学際知」が不可欠であると考えます。そのために、現在の3専攻を1専攻に改編してテーマを共有する研究室を集めて講座を編成することにより、隣接分野との対話や連携をしながら視野の広い「学際知」を確立することを目指します。

このような人材を育成し社会に輩出することについてどのように評価されますか。

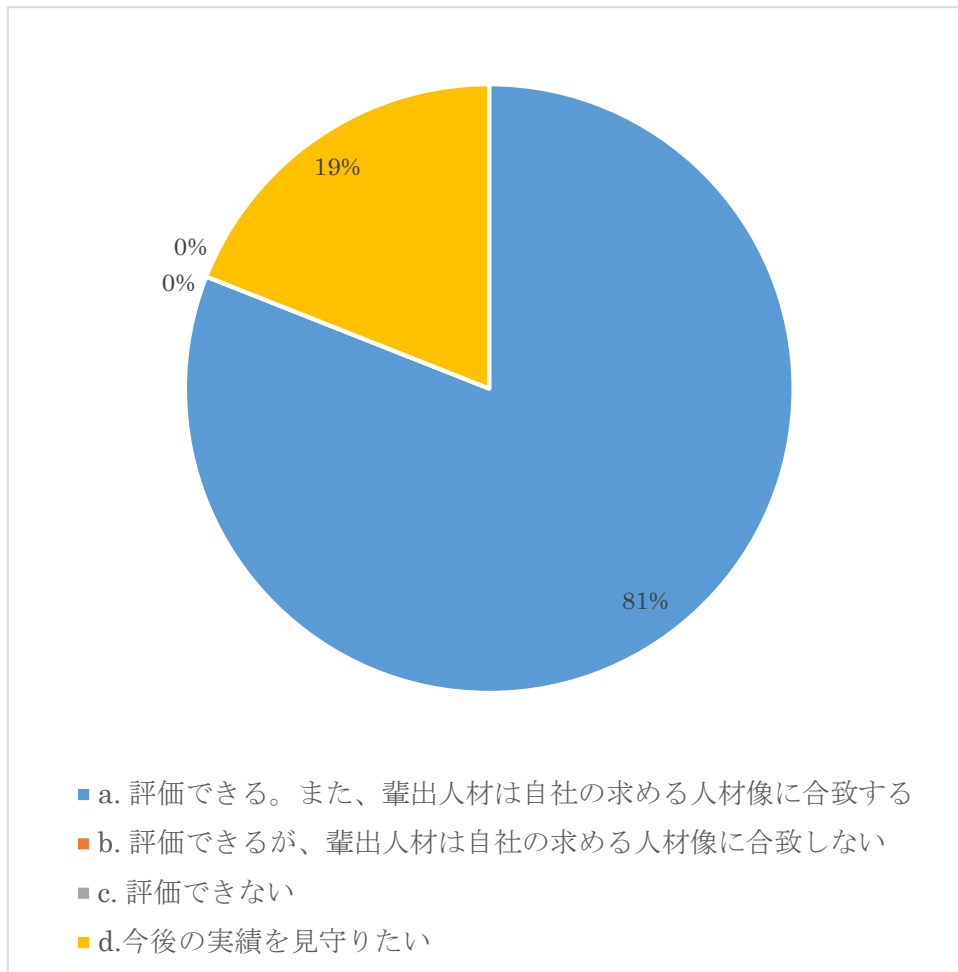
- a. 評価できる。また、輩出人材は自社の求める人材像に合致する
- b. 評価できるが、輩出人材は自社の求める人材像に合致しない
- c. 評価できない
- d. 今後の実績を見守りたい



2. 再編計画のもう一つの柱「学術越境センター」は、学術越境実践により学術架橋力を養成し、将来、総合知の創出と活用に貢献する人物の輩出を目指す組織です。特に、企業、海外大学、国際組織、他研究組織との連携を推進して学生が分野を越えた対話をする力である学術架橋力を養うことに注力します。

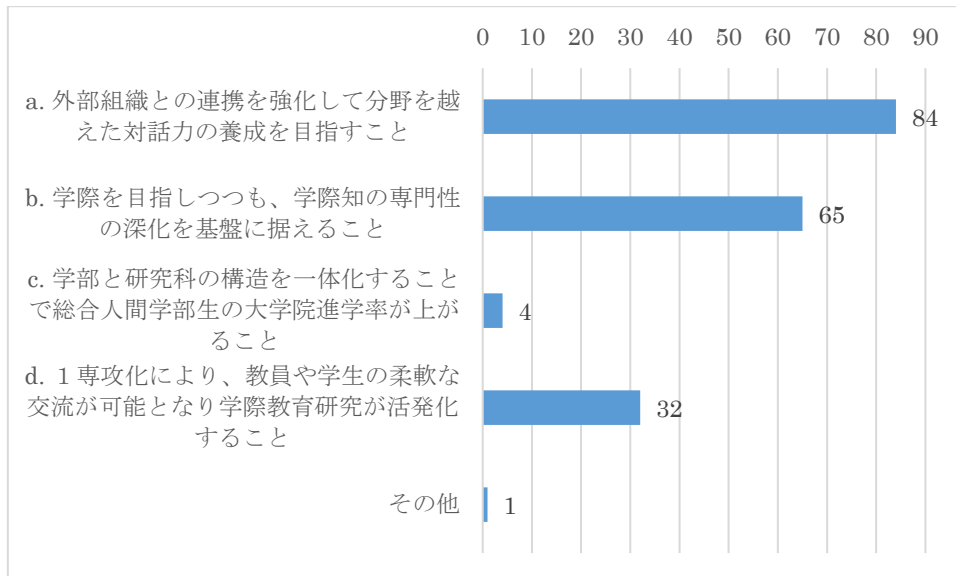
このような人材を育成し社会に輩出することについてどのように評価されますか。

- a. 評価できる。また、輩出人材は自社の求める人材像に合致する
- b. 評価できるが、輩出人材は自社の求める人材像に合致しない
- c. 評価できない
- d. 今後の実績を見守りたい



3. 今回の組織再編により本研究科が目指す次の項目について貴社が重要視する観点は何ですか（複数回答可）。

- a. 外部組織との連携を強化して分野を越えた対話力の養成を目指すこと
- b. 学際を目指しつつも、学際知の専門性の深化を基盤に据えること
- c. 学部と研究科の構造を一体化することで総合人間学部生の大学院進学率が上がる
- d. 1専攻化により、教員や学生の柔軟な交流が可能となり学際教育研究が活発化すること
- e. その他（ ）

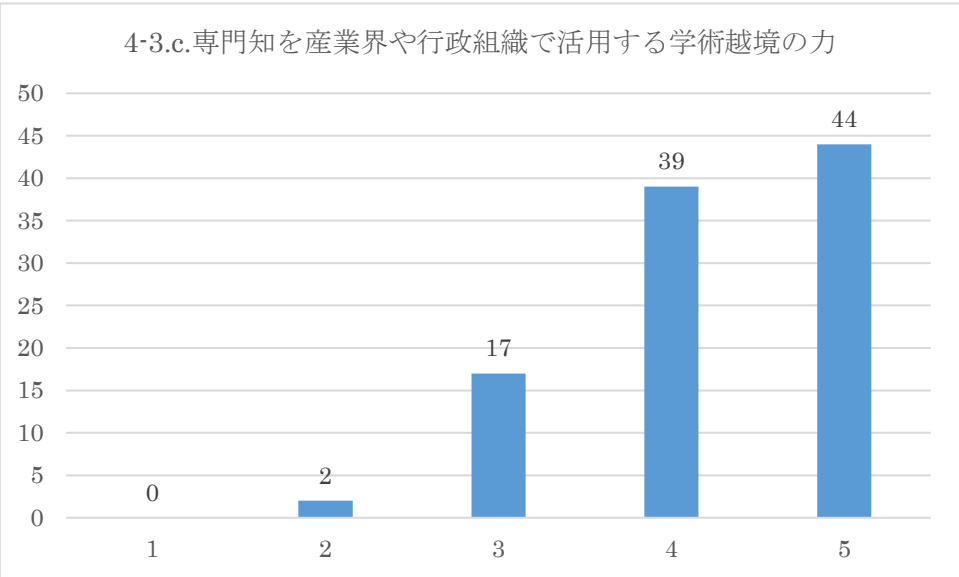
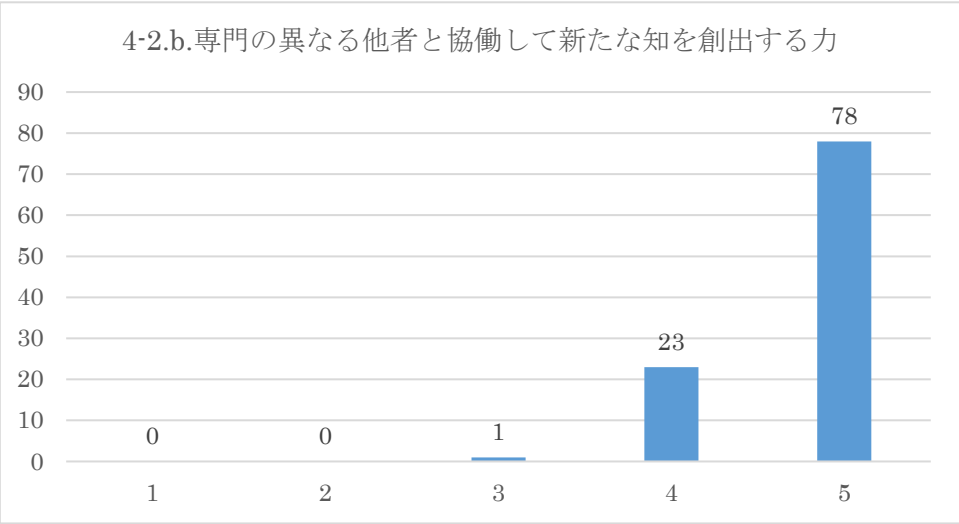
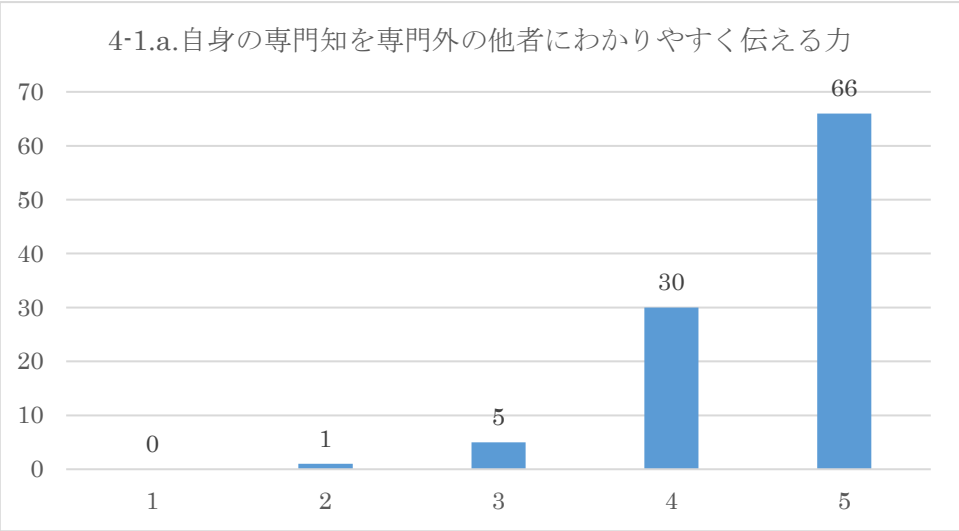


4. 本研究科を修了した学生は様々な領域で活躍することが期待されます。そのために身に付けておくべき素養として4つのことを想定し、その修得を目指しています。貴社にとって各素養がどの程度重要か、5点を最高として1～5点で評価をしてください。

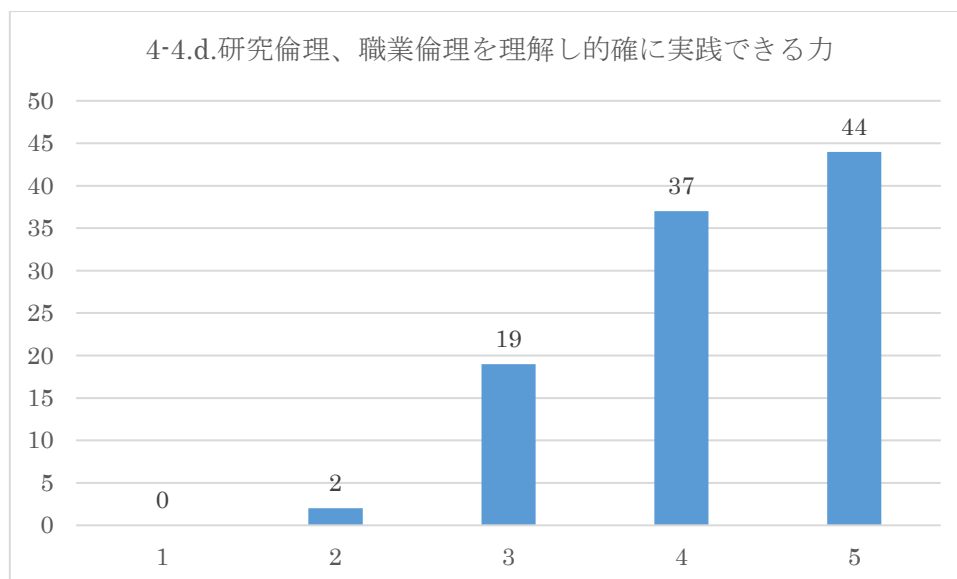
- a. 自身の専門知を専門外の他者にわかりやすく伝える力 (1・2・3・4・5)
- b. 専門の異なる他者と協働して新たな知を創出する力 (1・2・3・4・5)
- c. 専門知を産業界や行政組織で活用する学術越境の力 (1・2・3・4・5)
- d. 研究倫理、職業倫理を理解し的確に実践できる力 (1・2・3・4・5)

貴社が重要と思われる素養をお書きください

( )





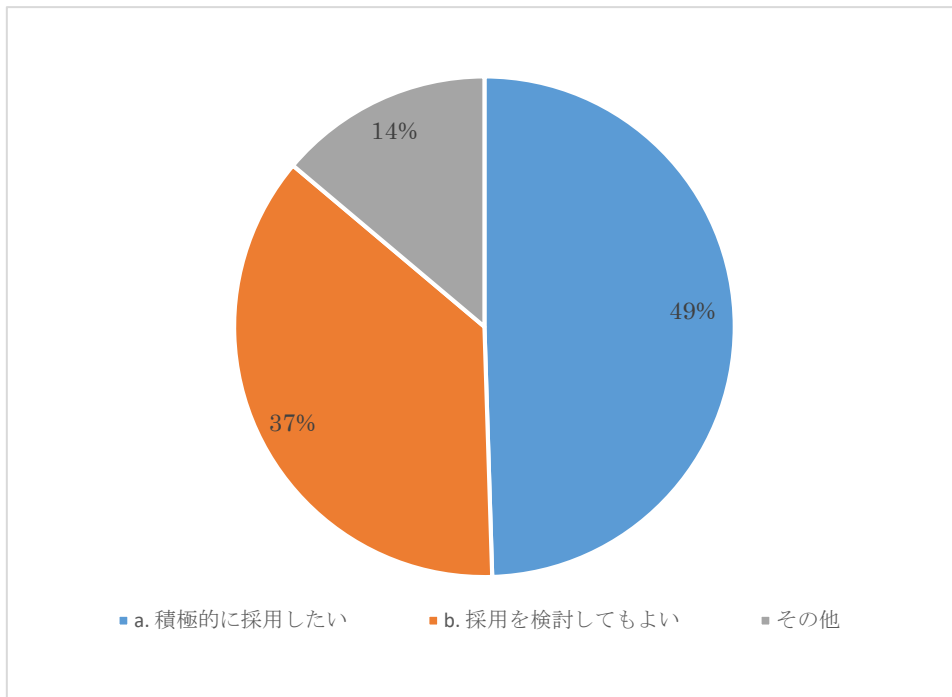


#### 貴社が重要と思われる素養

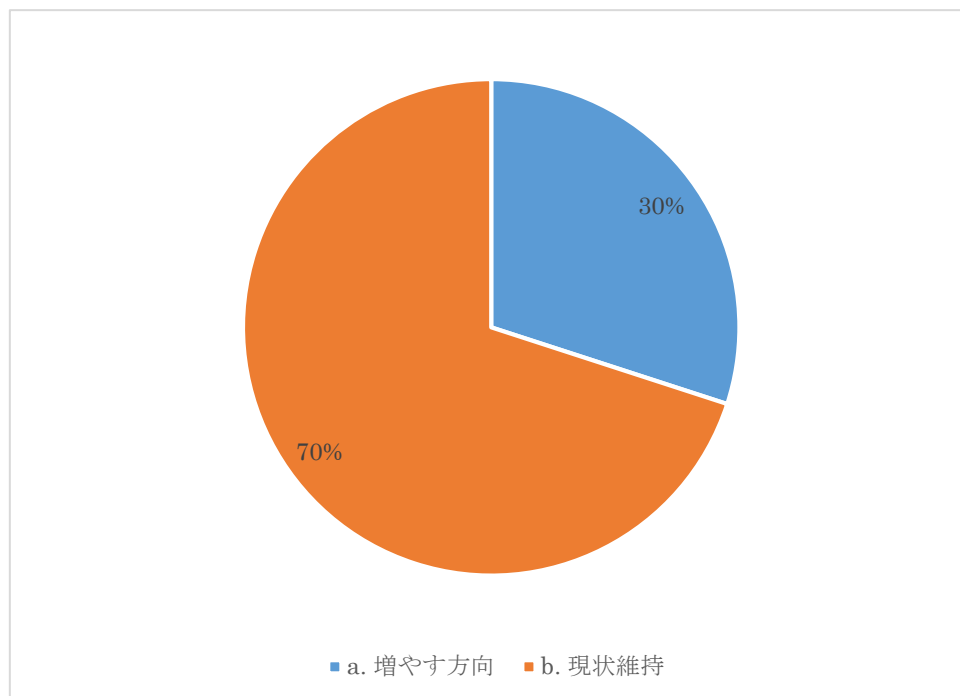
- ・素晴らしい考えと思います。大切なのは「知識」だけでなく「自頭」も必要です。そのためには、実際に人に会って、経験することが重要と思います。
- ・現場の中心にいる企業人との交流等があると良いと思います。
- ・①専門的な知見を専門用語を使わずにわかりやすい言葉でわかりやすく説明する能力、  
②異なる専門分野の様々な知見を正確に理解し、統合して、プランを策定する能力、  
③各専門分野における常識にこだわらず、社会一般の良識・倫理観をもとに判断する能力
- ・大学で深めた専門分野に加えて、新たな専門分野を自ら深めていくことが出来る力
- ・他者と協働できる力、傾聴力、対話力、多様性に対する理解
- ・弊社で近年特に力を入れている点として、「考動」が挙げられます。つまり他者の指示を待つのではなく、自ら考えて行動する能力が求められます。そのうえで複数分野にまたがる知識を持ち、他者に伝える力があれば理想的な人材になり得ると期待します。
- ・専門家同士をつなぐネットワーカーとなって、課題を見つけ解決する能力。
- ・高い専門性を持つが、自らの専門の範囲内の留まることなく、周囲への発信、周囲からの知識の吸収を抵抗なく行える。
- ・新たな知を創出する力
- ・新しい局面を打開していくために必要となる幅広い観点や視野。どんな分野の内容でも理解しようとする意欲。
- ・企業は研究職だけではないので、どの職種に就いても適応力を示せること。
- ・社会・世の中の抱える課題を主体的に探索・設定でき、その解決策を自身の経験、知識の範囲を超えて、異なる専門性を有する専門家や関係者を巻き込みながら、立案できる能力
- ・高い専門性にプラスして、自ら周縁技術に興味を持ち、積極的に自分の領域を広げていく自己伸張力
- ・特定分野で高い専門性を持ちつつも、広い視野で将来の技術や産業に対してビジョンが描ける人材
- ・現在の社会を起点を考えるのではなく、理想の未来からあるべきこれからの社会を考え、その実現を目指すために学び、行動できる人材。

- ・現在ある様々な課題をやり遂げる上で一人の専門家での対処は難しいことが多々あります。周囲を巻き込み、解決への方向性を見出し、導き、やり遂げることが重要です。この、「周囲を巻き込む」という力を養うことは重要と考えます。
  - ・広い分野内での立ち位置を理解した上で専門分野で深い研究もできる。
  - ・理系文系と特化することなく、幅広く俯瞰できる高い視座に立てること。
  - ・専門の異なる他社も巻き込み、課題解決に向けて統率していく力
  - ・自動車業界の大変革期において、他分野・他業界の参入・連携が加速し、専門外の人へ自身の専門知を分かりやすく伝える力が重要となってきました。弊社でも社員の能力向上・人材育成に努めております。
  - ・その時点での最適解だけを求めるのではなく、長い時間軸でも経時的な判断が矛盾することなく最終的な目標に到達できるように思考、解析、交渉、決断、修正ができる力
  - ・技術的な思考の根源となる専門分野の思考軸を1つ（できれば複数）持ち、その上で学際領域や行政等との橋渡しを考えられる能力が必要と考えます。
  - ・専門分野の高い知識および、分野の異なる他者への協調姿勢、説明能力、折衝能力。異なる分野・新しいことへの理解、受容姿勢、チャレンジ意欲。
  - ・非連続な変化を実現するための道筋を技術面だけでなく、社会受容性・行動経済学などの観点から描ける力、人と人とを繋ぐ発想力・行動力、広い視点・全体システムから構成要素へと課題をブレイクダウンする力。
  - ・分野をまたいだ専門知識を有しイノベーター的な発想力があること
  - ・特定分野の専門性を有しながら、他分野や他領域の専門家との文化、技術の発展に向けて有効な議論ができる。また、総合的な企画力。
  - ・専門知をベースとした諸問題の改善能力、市場ニーズに合致した提案能力
  - ・基礎的な専門知識の習得だけでなく、他分野とのコミュニケーション能力が高い人材
  - ・グローバルに活躍する成長への意欲に溢れた方
  - ・目的が明確だが、手段が未知な課題に対して、試行錯誤を繰り返しながらも、目的を達するまで諦めずやり抜くバイタリティと、その過程で、組織の枠を超えてコミュニケーションを図る能力
  - ・科学的知識と多面的視野に裏付けされた創造力
  - ・高い専門を有するスペシャリストよりは、極められた専門をベースとした、分野横断的な思考・行動に繋がられる素養を持ち得る人材が今後求められるのではと考えます。
  - ・異なる専門分野の相手に対する理解力の高さ、コミュニケーション能力の高さ
  - ・1. **Positive thinking** 2. 困難な状況でもあきらめずに取り組む精神。それらに追加して複合領域人材を重要視しています。得意とする専門領域が複数にまたがる人材、専門以外の領域でもその領域の専門家と議論のできる人材は極めて重要です。
  - ・学際による広い視野で、お客さまの真の課題を見つけ、解決し、社会へ貢献できる力 また、変化や困難に対して柔軟に対応し、楽しみながら最後までやり遂げる力
5. 本研究科の修了生は大学などの研究職だけでなく様々な領域における高い専門性を持つ職業人となることが期待されます。本研究科が育成した人物を貴社で採用したいとお考えですか。
- a. 積極的に採用したい
  - b. 採用を検討してもよい

- c. 採用には消極的
- d. その他



6. 今後の新卒採用者において、博士学位をもつ人材割合の方向性をご教示願います。
- 増やす方向
  - 現状維持
  - 減らす方向



7. 人間・環境学研究科全般に対しての疑問や質問、また設置準備中の学術越境センターに対する要望、期待する点などがあれば記述してください。

- 一つの専門を極めながらもその他の学術分野の素養も持つ人材は、今企業が求める人材像と一致していると感じています。広い視野で先見性のあるアイデアを持つ学生が育成されることを期待しております。
- 多分野融合し技術革新を起こす人材を育成することを目指した今の時代に求められている教育体制を構築する組織再編であり、優秀な人材が創出されることを期待します。
- 独創的な研究能力があり、その成果を社会に広めるためには幅広い分野の知識をベースにした高い社会的な意識が必要なのではと思います。その点から貴研究科の再編概念は大変頼もしく感じられます。
- 異なる専門の方と研究開発を行うことは多々ありますので、色々な分野の知見を得ることは重要だと思います。弊社だけでなく顧客にもそういった方がいますと、仕事がスムーズにいくと思います。
- 研究開発では大学院で学んだ専門分野以外の知識も使って研究するケースが多々あるので、幅広い知識を持つ研究者を育成していただきたい。
- 各学術分野における専門知を、それにとどまらず社会全体の進歩につながる発展的かつ柔軟な無限の可能性を秘めた専門知へと統合・発展させる能力を持つとともに、様々な分野で様々な知見と価値観を持つ多様な人材に対し、自己の知見を基にしたプランを説明し説得して実現し、敵対する人物をも包摂できる深い人間力を持った人材の養成を期待いたします。

- ・広い範囲の領域をまとめられるという事で、様々な分野を身近に知れるという事は学生さんにとって自分を見出す良い方策だと考えます。  
さらに学生さんの研究室移動が容易であれば、自分を活かす・成長させる機会を得ることができるのではないかと感じました。
- ・自身の専門性に一定の自信・プライドを持ちつつ、他者・他分野に対する理解を深める活動に賛同致します。専門性の深さは保ちつつ、多様な人材が育成されることを期待しております。
- ・科学技術と環境問題の両方に深い造詣を持ち、より広い視野から地球上の種々の問題に対する解決策を提案出来る人材を育成いただきたく、よろしく願いいたします。
- ・一つの領域の専門家だけでは、これからの時代にイノベーションは興せないと思います。複数の分野を統合することにより、複合領域人材を増やしていただければ大歓迎です。
- ・「学際知」「総合知」「学術架橋力」。様々な社会課題の解決に貢献できる人材を養成。弊社との考えとも合致しております。弊社でも多様な価値観、考え方を共有できる方。広い視野で、お客さまの真の課題を見つけ、解決し、社会へ貢献できる方を求めています。
- ・知識を高いレベルで融合し、新たな価値を生み出す能力を育てるという方針には賛同であり、多くの人材が輩出されることを期待しています。学内の教員のみならず、学外の知識人、産業人など、多くの経験者が集うことを期待しています。
- ・学術越境センターの3つの機能は企業活動においても非常に重要であり、この基礎を修得させる取り組みに期待します。
- ・学問領域の越境とともに、国際的かつ多角的な視点で事象に取り組める人材を育成して欲しい。
- ・世界のトップレベルの水準を目指した研究のなかで学習・経験したことは、産業界でも強く求められていると感じます。引き続き、国内トップの研究大学としての、研究指導に期待します。また、産業界では、アカデミックよりも、チームで働くことが多いので、個人は個性的な専門性を持ち、多様性はチームとして確保できます。幅広い好奇心を持ちつつも、大学院で深化させた専門性をもつ人材の輩出に期待しています。
- ・ダイバーシティ&インクルージョンの概念とも共通する部分があると感じました。学術面での多様性だけでなく、社会全体で求められていることについても一般的知識と教養を身に付けた人材の育成に期待します。
- ・学問領域の越境とともに、国際的かつ多角的な視点で事象に取り組める人材を育成して欲しい。
- ・学術越境センターについては、理念はよいと感じますが、他事例では理念倒れに終わっているケースもあり、ぜひ実効性が担保されたものとなることを期待します。
- ・現在、企業においては「リカレント教育」に注目が集まっておりますが、学生時代より「周辺分野との対話による学際知の深化」を学ぶことは、将来的に民間で働くことになった場合においても、学び続ける・進化しつづける人材となりうる可能性が高いと受け止めており、本取組に対して期待しております。
- ・当社では産学連携による価値創造が将来の社会にとって必須と考えております。ぜひご指導よろしく願いします。
- ・くれぐれも専門性の育成を犠牲にすることのないよう、深さ・広さ・連携のバランスを考慮いただければと思います。
- ・文理融合による現職教授のコピーを作らないフレキシブルな運営、外部人材の活用やサバティカル制度等による産学人材流動の活性化。
- ・軸足と裾野の広がりの方のバランスが重要かと思います。人材採用するにはその研究室は何をやっている

る研究室かという見方もありますので、軸足の定義、範囲も分かりやすく決める必要があるように感じております。

- ・学術越境の方向性は素晴らしいが、京大生の独創性が消えることは望まない。独創性を伸ばしつつ、各分野同士が新しい価値を創出出来るような Win-Win の取り組みに期待します。
- ・これから求められる「人材の多様性」を踏まえて、境域の場で実践して下さい。
- ・学びうる「知」を的確に実践できる、社会における即戦力となる人材教育・育成。
- ・当社では産学連携による価値創造が将来の社会にとって必須と考えております。ぜひご指導よろしく申し上げます。
- ・各分野で活躍する外部の人材が自身の経験に基づく講義をされることで、受講生の琴線に触れ、将来にわたり記憶に残るような機会がぜひあればいいと思います。
- ・高校生までに培った固い頭を柔らかい頭に、はっきりとした境界認識をぼんやりとした境界認識に変える刺激を大学が与えることで、人間力を備えた人材の排出を継続していただきますよう、心より期待しております。

京都大学大学院人間・環境学研究科

## 「京都大学大学院人材の採用と評価に関するアンケート」

京都大学大学院 人間・環境学研究科では、新専攻「人間・環境学専攻」と新たな組織「学術越境センター」の開設を計画しています。教養知を基盤として異なる学術分野を橋渡しできる「学術架橋力」を養成し、将来、人文・社会科学の知と自然科学の知を融合した「総合知」の創出と活用に貢献できる人物の輩出を目的とした再編計画です。以下がその主なポイントです。

- ・現在の3専攻（文系・理系）を1専攻（人間・環境学専攻）とすることで、様々な社会課題の解決に貢献できる異なる学術分野を橋渡しする「学術架橋力」を備えた人材を養成する。  
（専門の異なる他者との協働、産業界や行政機関との橋渡しができる最先端領域で活躍できる職業人）
- ・同時に、学術越境センターが提供する海外大学への留学、企業への長期インターン、他の研究組織との共同研究を実施し、養成する人材を支援する体制を整備する。
- ・研究者に限らない高度な専門職業人の養成（キャリアパスの多様化）にも取り組みます。

この計画を推進するにあたり、企業の方々からご意見を賜りたく、この度以下のようなアンケートを準備いたしました。別添の組織再編に関する概要の資料をご一読いただき、下記の項目にご回答いただければ幸いです。

**なお、本設置計画は現在構想中のものであり、今後、計画内容に変更があり得ることを申し添えます。**

ご回答くださいました結果は集計したのち、今回の研究科の組織再編のための資料としてのみ使わせていただく予定です。ご回答頂いた方の個人名や所属の会社名など個人情報に関わる部分はこのアンケート集計からすべて削除し、守秘義務を堅持し公表しないことをお約束致します。

ご協力をお願い致します。

---

**参考：再編の概要**

**※本設置計画は現在構想中のものであり、今後、計画内容に変更があり得ること申し添えます。**

- ✓ 現行の3専攻14講座を1専攻10講座に一本化（1専攻化・講座の再編による学際教育研究推進体制の充実）
- ✓ 附置教育研究施設として「学術越境センター」を設置（専任教員を配置し学内外との連携・融合の強化）



- 急速な変化の渦中にある日本、世界は、様々な社会課題に直面している。この危機に対して、非連続的なイノベーションにより課題解決に貢献するためには、学術分野を橋渡してできる「学術架橋力」を有する人物育成と輩出が喫緊の課題
- 一本化により、学内外教育組織・支援組織と連携しつつ、人社系と理系研究の融合を加速し、教養知を基盤とした「学術架橋力」を備え、将来、Society 5.0に求められる人文・社会科学と自然科学の知を融合した「総合知」の創出と活用貢献できる人物を輩出

**人と社会の未来研究院**  
 人社系学際研究におけるハブ的役割  
 学際研究企画・新分野開拓  
 研究成果の可視化・発信

**国際高等教育院**  
 総合知を養う統合科目や  
 国際教養科目の提供

**産学連携本部**  
 産官学連携PJ推進

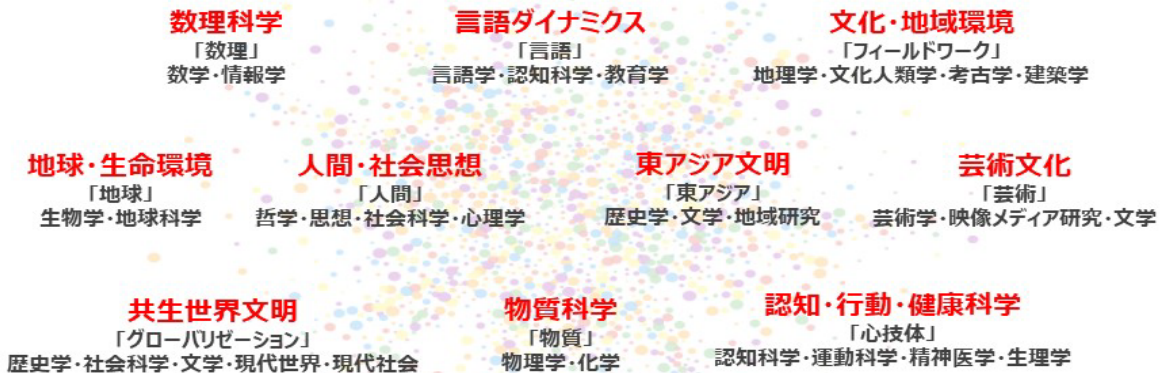
**学内他部局**  
 部局の教育研究を越境  
 多様な研究領域との融合

**学術研究支援室**  
 文理融合促進  
 研究力強化支援

**国内外大学・研究機関**  
 部局の教育研究を越境

**学部と大学院を貫く10講座**

**※本設置計画は現在構想中のものであり、今後、計画内容に変更があり得ること申し添えます。**



1つの専門を極めながらもその他の学術分野をサブスペシャリティとする素養をもち、学術分野を橋渡してできるような人材を育てる

\* 講座名は仮称（変更の可能性あり）



大学院人材の採用と評価に関するアンケート（企業対象）

以下の質問 1-7 に回答ください。

1. 前文のとおり、本研究科では 異なる学術分野を橋渡してきける人材を養成 することを目指しています。本研究科が目指す「学術架橋力の養成」の実現には、周辺分野との対話により深化された視野の広い学知である「学際知」が不可欠であると考えます。そのために、現在の3専攻を1専攻に改編してテーマを共有する研究室を集めて講座を編成することにより、隣接分野との対話や連携をしながら視野の広い「学際知」を確立することを目指します。  
このような人材を育成し社会に輩出することについてどのように評価されますか。
  - a. 評価できる。また、輩出人材は自社の求める人材像に合致する
  - b. 評価できるが、輩出人材は自社の求める人材像に合致しない
  - c. 評価できない
  - d. 今後の実績を見守りたい
  
2. 再編計画のもう一つの柱「学術越境センター」は、学術越境実践により学術架橋力を養成し、将来、総合知の創出と活用に貢献する人物の輩出を目指す組織です。特に、企業、海外大学、国際組織、他研究組織との連携を推進して学生が 分野を越えた対話をする力である学術架橋力を養う ことに注力します。  
このような人材を育成し社会に輩出することについてどのように評価されますか。
  - a. 評価できる。また、輩出人材は自社の求める人材像に合致する
  - b. 評価できるが、輩出人材は自社の求める人材像に合致しない
  - c. 評価できない
  - d. 今後の実績を見守りたい
  
3. 今回の組織再編により本研究科が目指す次の項目について貴社が重要視する観点は何ですか（複数回答可）。
  - a. 外部組織との連携を強化して分野を越えた対話力の養成を目指すこと
  - b. 学際を目指しつつも、学際知の専門性の深化を基盤に据えること
  - c. 学部と研究科の構造を一体化することで総合人間学部生の大学院進学率が上がること
  - d. 1専攻化により、教員や学生の柔軟な交流が可能となり学際教育研究が活発化すること
  - e. その他（ ）
  
4. 本研究科を修了した学生は様々な領域で活躍することが期待されます。そのために身に付けておくべき素養として4つのことを想定し、その修得を目指しています。貴社にとって各素養がどの程度重要か、5点を最高として1～5点で評価をしてください。
  - a. 自身の専門知を専門外の他者にわかりやすく伝える力（1・2・3・4・5）
  - b. 専門の異なる他者と協働して新たな知を創出する力（1・2・3・4・5）

- c. 専門知を産業界や行政組織で活用する学術越境の力 (1・2・3・4・5)
- d. 研究倫理、職業倫理を理解し的確に実践できる力 (1・2・3・4・5)

貴社が重要と思われる素養をお書きください

( )

- 5. 本研究科の修了生は大学などの研究職だけでなく様々な領域における高い専門性を持つ職業人となることが期待されます。本研究科が育成した人物を貴社で採用したいとお考えですか。
  - a. 積極的に採用したい
  - b. 採用を検討してもよい
  - c. 採用には消極的
  - d. その他
- 6. 今後の新卒採用者において、博士学位をもつ人材割合の方向性をご教示願います。
  - a. 増やす方向
  - b. 現状維持
  - c. 減らす方向
- 7. 人間・環境学研究科全般に対しての疑問や質問、また設置準備中の学術越境センターに対する要望、期待する点などがあれば記述してください。

( )

アンケートは以上です、ご協力ありがとうございました。

京都大学大学院人間・環境学研究科